

いじめ傍観者の援助抑制要因の検討

大 坪 治 彦

(1998年10月15日 受理)

Analysis of the Attitude of Bystanders to Bullying(Ijime) in Primary School

Haruhiko OHTSUBO

昨今のいじめは、昔に比べて陰湿で残忍な方法がとられ、しかもそれが長期にわたって続くと言われている（深谷，1985，1996）。こうした状況が現れる要因には、児童生徒をとりまくストレスの増加や彼ら自身のストレス耐性の低下なども指摘されるが、もっとも直接的な原因として、まさに「歯止め」の存在の欠如があろう。このいじめに対する「歯止め」は、第1にいじめ加害者本人の「これ以上やったらヤバイな」という自分自身の行為にブレーキをかけることであり、それは相手である被害者の痛みを理解することや自分の行為がもたらすであろう結果の予測が不足していることに大きな原因があることは明らかである。「歯止め」の第2として、教師をはじめとして大人たちの制止や指導が重要であることも当然であろう。しかし、いじめ自体が陰湿になればなるほど大人たちの目に留まりにくいこともまた事実である。第3の「歯止め」は、いじめ自体をいろいろな思いで見守る第3者の児童生徒によるブレーキである。こうした「歯止め」に関して、1980年代以降、多くの研究は第1の「歯止め」すなわち加害者の暴走をどう自制させるか、あるいは何故彼らはそれほど「残酷」なのかについて精力的に行われてきた。

しかし、こうした研究の多くが、現代のいじめの特徴の1つである「立場の流動性」(森田，1985)の壁で大きくつまづいている。すなわち、現代のいじめは、「いじめっ子」-「いじめられっ子」という固定的役割が存在する場合よりも、昨日の「いじめられっ子」が今日は「いじめっ子」にまわり、今日の「いじめっ子」が明日は「いじめられっ子」になることもあるというように、その役割がきわめて流動的である場合が多いという特徴を持つのである。「いじめっ子」のストレスや行動はけっして「特定の子」に限定されるものでもなく、特定の「ブレーキの利かない子」というような設定が困難なのである。こうした「立場の流動性」は、今いじめられていない子どもも明日はいじめられるかもしれないといった不安の感情を集団の中に形成する。「いじめられっ子」が必ずしも固定的でないという状況の中で、一方で凄惨な集団いじめが生起してしまうことは、こうした不安状況がもたらしているともいえる。

こうした不安な状況の中でいじめ場面に遭遇する第3者の児童生徒は、明らかに「歯止め」的行動を手控えている。前述の「いじめの可視性」が低下している現代、いじめを抑止する力を期待し、

また育むべきはこの第3者の児童生徒に対してなのである。多くのいじめ場面で、児童生徒の意識では、少数の加害者、少数の被害者、そして多数の第3者であることも、学校教育としていじめに取り組むべき大きな課題となることの根拠を与えるはずである。正高 (1998) も、このいじめ傍観者の存在こそ現代のいじめで最も憂慮すべきことであるとしている。

「いじめない」というスローガンだけでいじめが抑止されないことは、これまでの多くの実践例が示唆することである。したがって、こうした傍観者をいかに援助的行動に駆り立てるかこそ、緊急の課題と言えるのである。援助が期待される場面での傍観者の行動自体については、Latane et al. (1970) はじめ多くの研究があるが、いじめ場面に限定して行われ始めたのは最近のことである (例えば、野本ら, 1995)。

山崎 (1996) は、加害者や被害者といったいじめの当事者ではなく、それを取り巻く観衆・傍観者といった第3者について、なぜ彼らが被害者に対して援助しないのか、その援助抑制要因についての研究を行っている。彼は、全35項目の援助抑制要因項目を小学校5年生と中学校2年生に回答させ、援助抑制要因としてTable 1に示す6因子を抽出している。その結果、各因子の影響の強さが学年や性といった要因で有意な差を示すことを明らかにし、いじめ問題やその対応策を考えると、学年や性を考慮すべきことを示唆している。

Table 1 山崎 (1996) が行った援助抑制要因の分析結果

因 子 名	小5男	小5女	中2男	中2女	主 効 果		交 互 作 用
					学 年	性	
I 関与の否定	0.06 (1.13)	-0.20 (0.93)	0.20 (1.01)	-0.02 (0.90)		**	
II 被害者への帰属	-0.22 (0.97)	-0.27 (0.85)	0.33 (1.14)	0.20 (0.89)	**		
III 事態の肯定	0.06 (1.03)	0.02 (0.94)	0.12 (1.22)	-0.21 (0.74)			
IV 恐怖に対する防衛	-0.47 (1.04)	-0.02 (0.91)	0.08 (1.02)	0.39 (0.87)	**	**	
V 他者への評価懸念	-0.13 (0.92)	-0.08 (1.02)	-0.11 (1.06)	0.34 (0.93)	*	**	*
VI 問題の否認	0.14 (1.02)	-0.09 (0.95)	0.14 (1.16)	-0.18 (0.81)		**	

() は、標準偏差を示す

** $p < .01$ * $p < .05$

一方、児童・生徒が直面する実際のいじめの場面では第3者と加害者あるいは被害者との人間関係や、加害者側の人数などが様々であり、それらが第3者の援助抑制に及ぼす影響が考えられる。そこで本研究では、性、加害者側の人数、第3者と当事者の人間関係の3つの要因を独立変数とし、それぞれが援助抑制にどのような影響を与えるかを検討することを目的とする。

方 法

〈調査対象〉鹿児島市内の公立小学校5、6年生（男子150名、女子168名）合計318名。1996年12月調査実施。

〈調査項目〉質問紙は以下のように構成された。

①いじめ場面の仮想物語：山崎（1996）の「いじめ場面の仮想物語」による調査を参考に、いじめを認知しているにもかかわらず、被害者に対して援助しない第3者を想定し、登場する第3者と加害者、あるいは被害者との人間関係（加害者と友達・被害者と友達・両者と友達・両者と友達でない）、加害者の人数（単数・複数）の2つの要因をもとに計8場面を設定し、物語を作成した。なお、登場人物には、男女ともに用いられる愛称を付け、各調査対象者と同性であると想定することを求めた（Table 2～9 参照）。

②援助抑制要因項目：第三者の被害者への援助を抑制する要因に関する項目で、山崎（1996）を参考に4項目を削除、新たに1項目を加え計32項目の4件法とした。各項目は得点が高いほど援助を抑制する程度が強くなることになる。

③〈手続き〉学級単位で一斉に調査した。学年差及び学級差を無くすために、全てのクラスに8条件が均等に割り当てられるようにした。

Table 2 加害者単数・被害者と友達場面

もし、あなたのクラスののんちゃんが、よっちゃんから毎日たくさん悪口を言われているとします。あなたはのんちゃんととても仲良しです。

あなたは、毎日その場面を見ていますが、何もすることができません。それはどうしてですか。

Table 3 加害者単数・加害者と友達場面

もし、あなたのクラスののんちゃんが、よっちゃんから毎日たくさん悪口を言われているとします。あなたはよっちゃんととても仲良しです。

あなたは、毎日その場面を見ていますが、何もすることができません。それはどうしてですか。

Table 4 加害者単数・両者と友達場面

もし、あなたのクラスののんちゃんが、よっちゃんから毎日たくさん悪口を言われているとします。あなたはよっちゃんとのんちゃんのどちらともとても仲良しです。

あなたは、毎日その場面を見っていますが、何もすることができません。それはどうしてですか。

Table 5 加害者単数・両者と友達でない場面

もし、あなたのクラスののんちゃんが、よっちゃんから毎日たくさん悪口を言われているとします。あなたはよっちゃんとのんちゃんのどちらとも仲良くありません。

あなたは、毎日その場面をみっていますが、何もすることができません。それはどうしてですか。

Table 6 加害者複数・被害者と友達場面

もし、あなたのクラスののんちゃんが、よっちゃんたち5人から毎日たくさん悪口をいわれているとします。あなたはのんちゃんとても仲良しです。

あなたは、毎日その場面を見っていますが、何もすることができません。それはどうしてですか。

Table 7 加害者複数・加害者と友達場面

もし、あなたのクラスののんちゃんが、よっちゃんたち5人から毎日たくさん悪口をいわれているとします。あなたはよっちゃんたちとても仲良しです。

あなたは、毎日その場面を見っていますが、何もすることができません。それはどうしてですか。

Table 8 加害者複数・両者と友達場面

もし、あなたのクラスののんちゃんが、よっちゃんたち5人から毎日たくさん悪口を言われているとします。あなたはよっちゃんたちとのんちゃんとどちらともとても仲良しです。

あなたは、毎日その場面を見っていますが、何もすることができません。それはどうしてですか。

Table 9 加害者複数・両者と友達でない場面

もし、あなたのクラスののんちゃんが、よっちゃんたち5人から毎日たくさん悪口を言われているとします。あなたはよっちゃんたちとのんちゃんとどちらとも仲良くありません。

あなたは、毎日その場面を見っていますが、何もすることができません。それはどうしてですか。

結 果

1. 援助抑制要因の構造

項目分析の結果3項目を削除した。残された29項目について因子分析（主成分法，Varimax 回転）を行った。その結果，6 因子を抽出し，Ⅰ「事態の肯定」，Ⅱ「被害者への帰属」，Ⅲ「いじめへの恐怖」，Ⅳ「評価懸念」，Ⅴ「事態の悪化への懸念」，Ⅵ「事態解決糸口のなさ」と命名した。因子分析の結果を，Table10に示した。

Table 1 の山崎（1996）の結果と比較すると，山崎（1996）では第3因子であった「事態の肯定」が第1因子となり，第1因子であった「関与の否定」因子が消失している。これは，もともと，「関与の否定」という因子がそれ自体援助抑制行動の同語反復的な曖昧さを残すものとして，問題を持つものであり，本研究ではこのことを問題視して項目の一部を改変した結果によるものであると考えられる。その結果，最も寄与率の高い第1因子に「事態の肯定」が浮上したのであるが，この因子が項目にあるように「いじめを面白がる」要素を多く含むものであることは注目すべきである。

山崎（1996）が第6因子にあげた「問題の否認」因子は本研究では抽出されなかったが，その代わりに新たに「事態の悪化への懸念」（第5因子）や「事態解決の糸口のなさ」（第6因子）が抽出された。この新たに抽出された2つの因子は共に，援助を手控えている第3者の自分自身に対する正当化，合理化的な心情の表れと見ることもできる。

Table 10 援助抑制要因項目の因子構造と因子負荷量（29項目・6因子）

因子名	質 問 項 目	I	II	III	IV	V	VI
Ⅰ 事態の肯定	5. いじめられているのを見るのがおもしろいから	.78	.01	-.01	-.08	-.01	.04
	11. いじめられているのを見るのが楽しいから	.76	-.01	-.01	-.19	-.05	.20
	7. 助けても自分はとくしないから	.57	.35	.08	.22	.03	-.01
	29. のんちゃんのことをかわいそうだと思わないから	.57	.15	-.08	.23	.24	-.23
	21. 助けるのがめんどうだから	.56	.23	.12	.34	-.04	-.08
	13. 自分のことだけでいそがしいから	.53	.27	.11	.28	.09	.07
	17. 自分には関係ないから	.50	.33	.23	.24	.15	-.14
	22. 自分が助けることをたのまれたわけではないから	.45	.28	.15	.15	.23	-.01
	24. のんちゃんがいじめられていることに気にならないから	.41	.36	.14	.14	.06	-.25
	25. 自分がいじめられているわけではないから	.41	.39	.13	.13	.09	-.27
Ⅱ 被害者への帰属	19. 思いやりがないから	.40	.31	.17	.17	.14	.04
	8. のんちゃんがいじめられるようなことをしているから	.05	.73	-.09	-.09	.05	.13
	18. のんちゃんが自分自身で何とかすべきだと思うから	.22	.65	.13	-.02	.05	.15
	2. のんちゃんに悪いところがあるから	.12	.60	.05	-.02	.07	-.32
	32. のんちゃんがそれほどいやがっているように思わないから	.16	.56	-.05	.23	.03	.05
	20. そんなにひどくいじめられているわけではないから	.19	.55	.03	.29	-.01	-.01
Ⅲ いじめに対する恐怖	16. 何もしなくてもそのうちおさまると思うから	.30	.49	.20	.24	.22	.11
	1. のんちゃんのことを気に入らないから	.21	.42	-.12	.33	.23	-.37
	30. 助けると自分もいじめられるから	.04	.07	.79	-.01	.19	-.09
	15. 助ける勇気がないから	.04	.05	.77	.21	-.05	.17
Ⅳ 評価懸念	6. いじめっ子がこわいから	.05	-.08	.72	-.08	.16	.12
	9. 自分にのんちゃんを助ける力がないから	-.05	-.12	.63	.35	.09	.21
	28. みんなにいい子ぶっていると思われたくないから	.10	.37	.53	.19	.22	.02
Ⅴ 事態の悪化への懸念	23. 目立ちたくないから	.14	.05	.18	.69	.19	-.10
	10. 人に注意するのがはずかしいから	.06	.32	.26	.55	-.18	.39
	31. のんちゃんたちに関わりたくないから	.40	.23	.15	.41	.13	-.06
Ⅵ 事態解決の糸口のなさ	27. 助けたらのんちゃんをもっとひどいめにあうと思うから	-.00	.15	.21	-.01	.71	-.03
	4. おせっかいだと思われたくないから	.15	.02	.12	.20	.60	.23
	3. どのようにのんちゃんを助けていいかわからないから	.05	.16	.15	.01	.30	.64

2. 第3者の性や当事者との人間関係が与える影響

①第1因子「事態の肯定」に関して

平均因子得点について、性（男・女）×加害者数（単数・複数）×加害者・被害者との人間関係（加害者と友達、被害者と友達、両者と友達、両者と友達でない）の3要因分散分析を行った。その結果、性の要因においてのみ主効果が見られた（ $F=19.24$, $df=1/302$, $p < .001$ ）。

すなわち、男子の方が女子よりも、事態の肯定がいじめへの援助抑制要因として有意に影響していることが言える。Fig. 1 に示したように、いわゆる「いじめを見て面白いがる」意識が、第3者をまさに「観衆」の立場にとどまらせており、その傾向が男子においてより著しいのである。

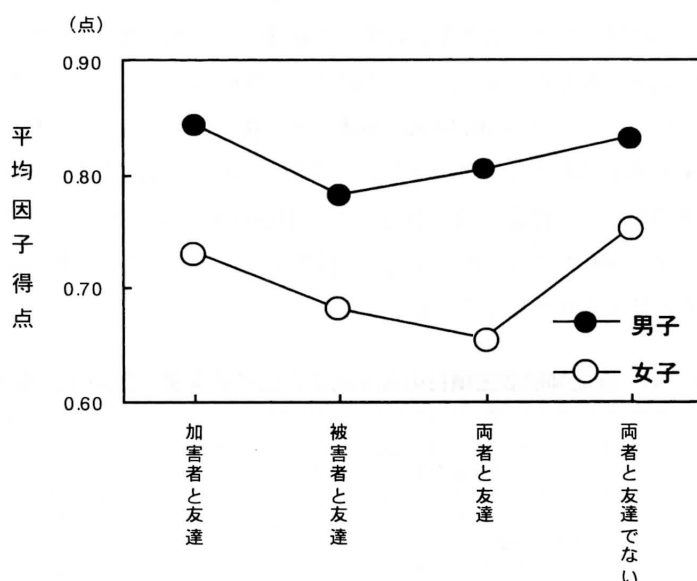


Fig. 1 事態の肯定因子における平均因子得点

②第2因子「被害者への帰属」に関して

分散分析の結果、性の要因において主効果が見られた（ $F=18.60$, $df=1/325$, $p < .001$ ）。

また、人間関係の要因において、主効果が見られた（ $F=3.32$, $df=3/325$, $p < .05$ ）。さらに、下位検定の結果、被害者と友人である条件、加害者・被害者と友人である条件と両者と友人でない条件の間に5%水準で有意差が見られた。

すなわち、Fig. 2 に示したように、男子の方が女子よりも「被害者への帰属」、言い換えると、「いじめの原因は被害者にあるのだからこの仕打ちはむしろ当然」といった意識がいじめへの援助抑制要因として有意に影響している一方、その第3者が被害者と友達である場合にはそうした意識が有意に少ないことが明らかになったと言える。

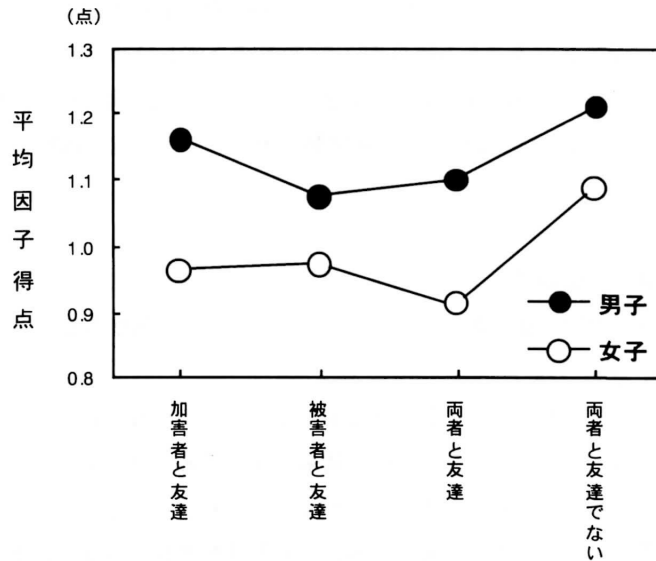


Fig. 2 被害者への帰属因子における平均因子得点

③第3因子「いじめへの恐怖」に関して

分散分析の結果、性の要因において主効果が見られた ($F=11.15$, $df=1/328$, $p < .001$)。

また、人間関係の要因において主効果が見られた ($F=4.23$, $df=3/328$, $p < .01$)。下位検定の結果、被害者と友達である条件、被害者・加害者と友達でない条件と、両者と友達である条件の間に有意差が見られた ($p < .05$)。

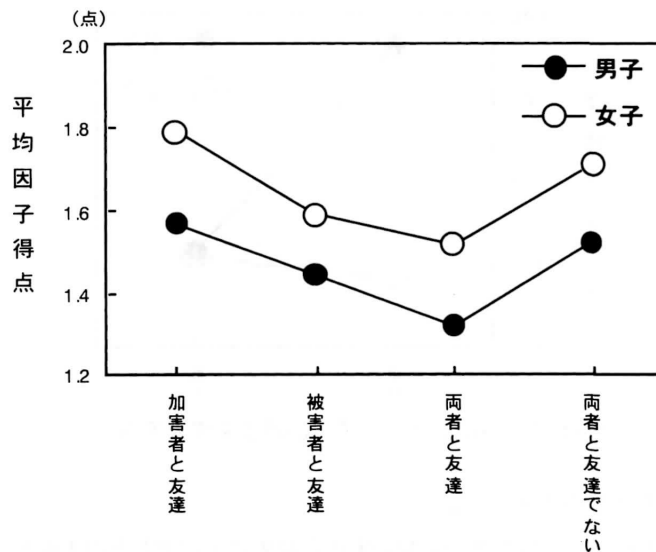


Fig. 3 いじめに対する恐怖因子における平均因子得点

すなわち、女子の方が男子よりも「いじめへの恐怖」が、第3者への援助抑制要因として有意に影響しており、また、両者と友達である場合、「いじめへの恐怖」はいじめへの援助抑制要因として有意に少なく、加害者と友達の場合や両方と友達でない場合、言い換えれば、被害者と友達でない場合は、「いじめへの恐怖」がいじめへの援助抑制要因として、有意に影響していることが明らかになった。

④第4因子「評価懸念」に関して

分散分析の結果、性の要因と加害者の人数の要因の2次の交互作用が有意である傾向が見られた ($F=2.89$, $df=1/324$, $p < .1$)。

単純主効果の検定の結果、加害者が単数である場合では、性の要因の効果が5%水準で有意であり、また男子においては、加害者の人数の要因の効果が有意であった ($p < .05$)。

すなわち、加害者が単数である場合、男子の方が女子よりも「評価懸念」がいじめへの援助抑制要因として有意に影響しており、また、男子の場合、加害者が単数である場合は、複数である場合よりも、「評価懸念」がいじめへの援助抑制要因として有意に影響していることが明らかになった。

男子では、加害者の人数が複数である場合より単数である場合の方が「評価懸念」を感じて助けられず、また女子では加害者が単数である場合において、男子と明らかな差が出た。このことから、男子は加害者が複数の場合はともかく1人の場合には、傍観ではなく「正義のヒーロー」となる可能性を感じるからこそ、その行為が他からどう評価されるかいわゆる「良い子ぶる」ことへの懸念を表明していると考えられる。

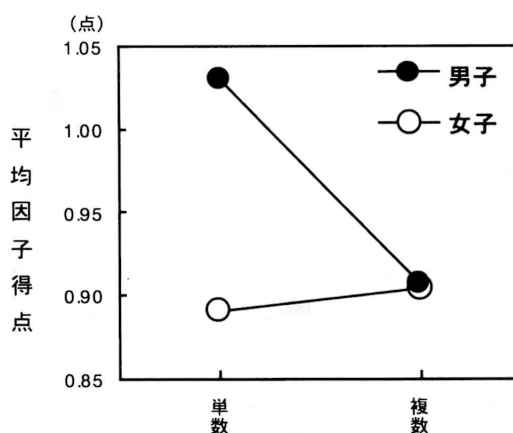


Fig. 4 評価懸念の因子における平均因子得点

⑤第5因子「事態の悪化への懸念」に関して

分散分析の結果、性の要因と加害者の人数の要因と加害者・被害者との人間関係の要因の間に3次の交互作用が有意であった ($F=3.59$, $df=3/325$, $p < .05$)。

したがって、男女別に分散分析を行った結果、男子においては、加害者の人数の要因と人間関係の要因の2次の交互作用が有意であった ($F=3.37$, $df=3/325$, $p<.05$)。単純主効果の検定の結果、加害者の人数の要因では、両者とも友達でない場合の効果が有意であり ($p<.05$)、人間関係の要因では加害者の人数が単数である場合の効果に有意差が見られた ($p<.01$)。すなわち、Fig. 5 に示したように、男子の場合、第3者としての自分の介入は、加害者が複数の場合には、第3者と当事者の人間関係のありようによって影響を受けないが、加害者が1人で、しかも当事者と友達でないという状態で、「事態がかえって悪くなる」といった意識を生んでいることがわかる。

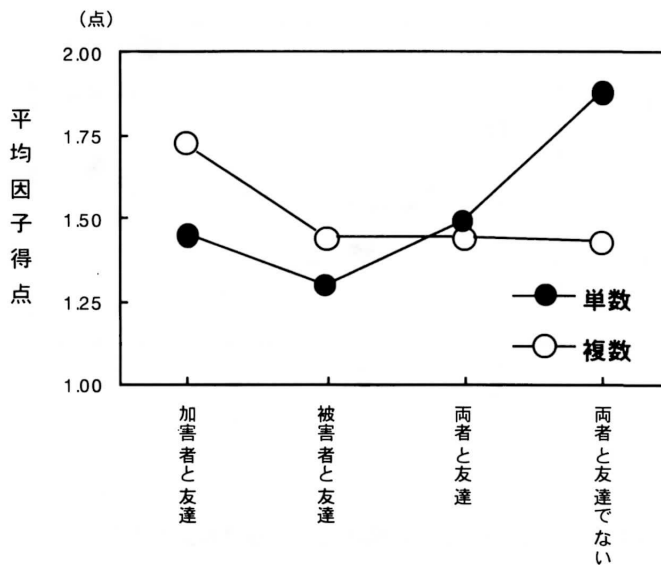


Fig. 5 事態悪化への懸念因子における男子の平均因子得点

女子においても男子と同様に、加害者の人数の要因と人間関係の要因の2次の交互作用が有意である傾向が見られた ($F=2.35$, $df=3/325$, $p<.1$)。単純主効果の検定の結果、加害者の人数が単数のときのみに人間関係の要因が有意な効果をもたらした ($p<.01$)。

すなわち、女子においても、男子と同様に加害者が1人であるときにのみ両者と友達関係にあるかどうかによって、自分の介入による「事態の悪化への懸念」がいじめへの援助行動を抑制する要因として強さを左右するものとして有意に影響していることが明らかになったと言える。しかし一方、Fig. 5 と Fig. 6 を比較するとわかるように、男子で見られたような、加害者が単数の場合に当事者と友達でないことがその要因を強めているとはいえないことも明らかである。

⑥第6因子「事態解決の糸口のなさ」に関して

分散分析の結果、加害者の人数の要因と加害者・被害者との人間関係の要因の2次の交互作用が有意であった ($F=2.76$, $df=3/333$, $p<.05$)。そこで各水準ごとの単純主効果の検定の結果、男子

では加害者の人数の要因は両者と友達である場合、両者と友達でない場合において有意であった ($p < .05$)。また友達関係の要因は複数条件においてのみ有意であった ($p < .05$)。女子においては、すべての水準で有意な差は見られなかった。また、性の要因と人間関係の要因の2次の交互作用が有意であった ($F=3.35$, $df=3/333$, $p < .01$)。各水準ごとの単純主効果の検定の結果、加害者が複数である場合では、性の要因は両者と友達である場合において有意な傾向が見られ、両者と友達でない場合において有意であった ($p < .05$)。また、人間関係の要因は、男子において有意であった ($p < .05$)。さらに、加害者が単数である場合においては、有意な差は見られなかった。

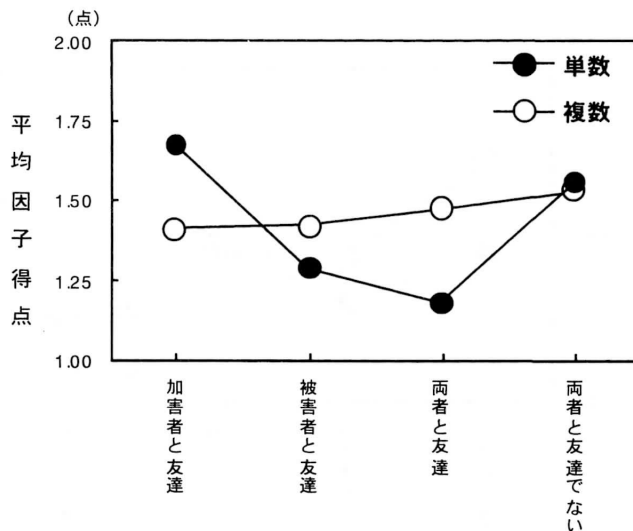


Fig. 6 事態の悪化への懸念因子における女子の平均得点

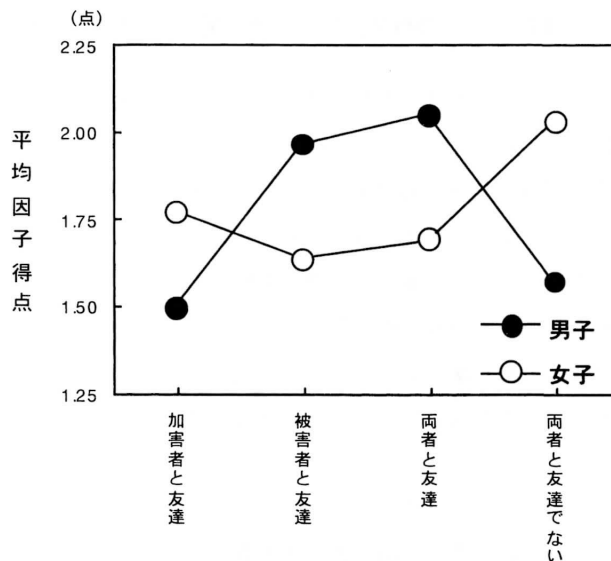


Fig. 7 事態解決糸口のなさ因子における複数条件の平均因子得点

すなわち、男子においては両者と友達である場合（ただし加害者は複数）に、「事態解決の糸口のなさ」が援助行動を抑制する要因として有意に影響していることが明らかになったと言える。また、加害者が複数である場合、両者と友達である場合には、男子の方にいじめへの援助行動を抑制する要因として有意であり、両者とも友達でないときには女子の方にいじめへの援助行動を抑制する要因として有意に影響していることが明らかになった（Fig. 7 参照）。

考 察

調査結果から、男子の方が女子と比較して「事態の肯定」意識がいじめの援助を抑制する要因として影響していることが分かる。項目の内容は、[いじめられているのを見るのがおもしろいから]、[いじめられているのを見るのが楽しいから]、[助けるのがめんどうだから]、といったものである。このような他人の不幸を喜んだり、自分さえよければよいといった考え方を反映する項目が「事態の肯定」の因子の中でも上位に位置していることは、現代の子供たちの複雑な内面（歪んだ心理状況）を、反映しているように思われる。

次に、「被害者への帰属」において第3者が被害者と友達である場合、いじめへの援助行動を抑制する要因として「被害者への帰属」因子が成立し得ないことが明らかとなった。すなわち、いじめへの援助行動は被害者とどういふ友達関係にあるかに強く影響されると言えるであろう。

この人間関係の要因は、「いじめに対する恐怖」においても、加害者・被害者の両方と友達である場合は、「いじめに対する恐怖」はほとんど影響せず、加害者と友達、加害者・被害者の両方と友達でない場合は、「いじめに対する恐怖」は有意に影響しているということが明らかである。また、この「いじめに対する恐怖」は、女子の方がどの人間関係の要因においても、男子より強く影響していることで、女子における「いじめに対する恐怖」が、よりいじめへの援助行動を抑制する要因として影響しているということが分かる。

いずれにせよ、第3者がいじめの当事者、とりわけ被害者と友達関係にあるかどうかが第3者の援助的行動を大きく左右するものであることが明らかである。

この傾向は「事態悪化への懸念」においても、加害者は単数である場合に特に男子において見いだされる。これは、両者とも友達でないという人間関係が、日常の生活であっても、当事者との間に疎遠な距離感を生み出していると思われる。したがっていじめの場面においても、当事者との間に一定の距離感を保ちつつ、事態の推移を見守る傍観者の行動が強く見られるのではないかと思われる。さらに、日常の希薄な人間関係が、いじめ場面におけるいじめへの援助行動を抑制する要因に影響をもたらすのではないだろうか。

参考文献

- 深谷和子 1985 「いじめ」－ギャング・エイジの異形の姿－ 現代のエスプリ，至文堂，228，5-18
深谷和子 1996 「いじめ世界」の子どもたち－教室の深淵 金子書房
Latane, B. & Darley, J. M. 1970 The unresponsive bystander : Why doesn't he help ? New York,

Appleton - Century - Crofts.

- 正高信男 1998 いじめを許す心理 岩波書店
- 森田洋司 1985 学級集団における「いじめ」の構造 ジュリスト, 有斐閣, 836, 29-35
- 森田洋司 1985 いじめの四層構造論 現代のエスプリ, 至文堂, 228, 57-67
- 野本智子・岡崎奈美子・野村邦子 1995 いじめ場面での第三者の対処に関する研究 発達研究, 11, 101-109
- 山崎 洋 1996 いじめにおける第三者の援助態度を抑制する要因 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 266